



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	アンソニー・マンの西部劇3：レオーネ研究ノート
Author(s)	西森, 和広
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(62): 21-38
Issue Date	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43906">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43906</a>
Rights	

## アンソニー・マンの西部劇Ⅲ（レオーネ研究ノート）

西森 和広

アンソニー・マン **Anthony Mann** の西部劇、『胸に輝く星』から最後の『シマロン』までの三作品を中心に見てゆく。

### 『胸に輝く星』 *The Tin Star*, Paramount, 1957

（パラマウント・ジャパン PHNE-105097）

製作 : William Perlberg, Gerge Seaton

脚本 : Dudley Nichols 原案 : Barney Slater, Joel Kane

撮影 : Loyal Griggs 音楽 : Elmer Bernstein

主な配役 : Henry Fonda (Morgan Hickman), Anthony Perkins (Ben Owens), Betsy Palmer (Nona Mayfield), Michael Ray (Kip Mayfield), Neville Brand (Bart Bogardus), John McIntyre (Dr. McCord), Mary Webster (Millie Parker), Richard Shannon (Buck Henderson), James Bell (Judge Thatcher), Lee Van Cleef (Ed McGaffey), Peter Baldwin (Zeke McGaffey)

【梗概】男が西部の町に馬に死体を載せてやって来る。男は死体を保安官事務所まで運ぶと、モーガン・ヒックマンと名乗り、賞金の500ドルを要求する。若い保安官、ベン・オーウェンスから手続きに時間が掛かると言われ、滞在先を探すが、ホテルでは冷淡な扱いを受ける。次いで向かった馬屋の主人は彼が倒した男のいとこのボガードスだった。馬屋で知り合ったキップという少年と仲良くなったモーガンは、母と二人暮らしの彼の家に迎えられる。少年の母がノナ・メイフィールドと名乗ると、少年をメキシコ系だと思っていたモーガン

は驚く。キップの父は先住民だった。

翌日、保安官事務所。ベンは恋人のミリーと諍いを始める。彼女の父は前の保安官だったが、駅馬車襲撃の犯人を追って殺害されていたため、ベンの保安官就任に反対していた。老医師マコードが訪れ、ベンの他に適任者はいないとただめるがミリーは収まらない。賞金の手続きにモーガンもやって来る。突然銃声が聞こえ、酒場から飛び出してきた男が撃たれて倒れる。撃ったのはボガードスだった。説得して逮捕しようとするベン、だがボガードスは帽子に隠して銃を抜こうとする。その瞬間モーガンがボガードスの銃を撃ち落とす。

ノナの家でベンがモーガンを訪ねる。証人が出て、ボガードスを正当防衛として釈放したと伝えると、元保安官だと知ったモーガンに教えを請う。断ろうとするモーガンだが、彼の熱意に負けて承諾する。河辺で銃の手ほどきをしていると、二人きりで牧場をやっているというエドとジークのマガフィー兄弟が通りかかる。モーガンは二人に先住民の血が入っていることを直ちに見抜いて、ベンを感心させる。

夜、モーガンはノナの打ち明け話を聞く。先住民のエージェントを務めていた父の下で偏見なく育った彼女はキップの父と結ばれた。だが人々の偏見から彼は死ぬことになり、息子も差別されてきたという。そしてそれでも彼女がこの町に留まっているのは、ただ一人差別なく接してくれるマコード医師がいてくれるからだ。

モーガンとの関係が町の重役たちの間で問題視され始めていると、ベンがマコードから忠告を受ける。彼が本当に元保安官だったのか不安になったベンから執拗に尋ねられ、モーガンは自分の過去を語る。かつて保安官だった時、妻子が病気になり、治療に多額の金が必要になった。だが長年友人として付き合いしてきた銀行家も援助してくれなかった。賞金を稼ごうと、お尋ね者を追って、やっと帰ってきた時にはすでに二人は死んでいた。そして保安官の職を辞したのだと。町長が訪れ、モーガンに賞金を渡すと、町を出るように促す。そこへ、駅馬車が二人組の強盗に襲撃されたという報が届く。護衛が一人を撃ったものの、本人も撃たれ、すでに事切れていた。ベンは犯人逮捕の追跡隊(posse)を組もうとモーガンにも協力を依頼するが断られる。モーガンは賞金

でキップへの贈りものに子馬を買ってノナの家に戻る。

その夜、農夫ピケットの家で出産の介添えを終えたマコードは、自分の誕生日前夜に生まれた子供を祝福する。十二人目にして初めて男の子を得たピケットは飛び上がらんばかりに喜ぶ。帰り道、マコードはエド・マガフィーから弟の治療を頼まれる。鹿と間違えて撃ってしまったと言う。夜明け、マコードは事件には一切触れずに帰るが、エドは銃を持って医師を追う。

マコードの誕生日を祝う町は祭りのように賑わっている。そこへ医師の馬車がゆっくり入って来る。だがその乗り手は殺されていた。残された治療記録から、昨夜最後の患者がジーク・マガフィーで、ショットガンによる傷を受けていたと分かる。マガフィー兄弟が馱馬車の襲撃と医師殺害の犯人と決まり、多額の賞金もかけられる。大勢の者が追跡隊に加わろうと集まるが、ベンにはどうしてよいか分からない。ベンを置いたまま、ボガードスが率いて追跡隊は進発する。ベンはモーガンに教えを請うが、暴徒と行動を共にせず、一人で逮捕に向かえと言われる。モーガンはノナの家に戻るが、キップがいないのに気付く。追跡隊の後を追ったに違いない。モーガンはキップを探しに向かう。

追跡隊は兄弟の牧場に着くが、二人の姿は無く、家屋を焼き払うと再び追跡を開始する。そこへキップがやって来る。一匹の犬を見つけたキップは、犬を追って山間に入って行く。遅れてモーガンがやって来るが、彼の姿に気付いたベンが来て、言い合いになる。ベンには賞金目当てでやって来たと思えない。犬を追ったキップは、知らずに飼い主の兄弟の居場所へ向かっていた。足手まといのベンを殴り倒してモーガンは一人で進む。犬は山腹の洞窟に逃げ込む。そこにはマガフィー兄弟がいた。近づくキップにエドが銃を放つ。慌てて逃げたキップをモーガンが見付け、保安官の元へ行くよう言う。様子を窺うモーガンの元にベンが上って来る。ベンは説得して逮捕しようと向かうが、発砲されて転落する。ただ弾は外れていた。モーガンはベンに援護を頼むと、洞窟の前で枯れ草を焼き、煙り出す作戦を取り、見事に二人を捕まえる。

町は逮捕を祝うが、ボガードスに扇動され、次第にリンチを前にした興奮状態に陥る。町長らは別の町に移送するよう指示するばかりで、ベンと共に暴徒たちに向き合う勇気はない。モーガンはベンにボガードスとの対決を促す。意

を決したベンは、ショットガンを持って群衆の前に立つ。ボガードス一人を相手と決めて対決を迫るベン。その後ろに胸にバッジを付けたモーガンが立つ。モーガンにショットガンを委ねると、ベンはボガードスの前に進み、平手で顔を張る。ひるんだボガードスは一旦は退くが、意を決して銃を抜く。が、その瞬間、ベンの銃が火を噴き、ボガードスは倒れる。

モーガンは、引き留めるベンやミリーに別れを告げ、ノナとキップと共に新天地を目指して町を去る。

．．．

脚本はジョン・フォードの『男の敵』や『駅馬車』のダドリー・ニコルズによるもので（アカデミー脚本賞にもノミネートされた。なお音楽は後の『荒野の七人』で有名になるエルマー・バーンスタイン、撮影は『シェーン』のロイヤル・グリッグス）、加えてヘンリー・フォンダ出演、また久しぶりのモノクロ作品ということで、かつてのフォード西部劇への郷愁がどことなく漂う。そのせいか、これまでマン西部劇を強烈に支配してきた「復讐者」のテーマは、全く無いわけではないが、それは背景に沈み込み、全体に大らかな、フォード的とよびたくなるような柔かさ、包容力が感じられる。主役が保安官であり、犯罪・殺人も描かれ、最後には正と邪の対決もある。西部劇で描かれる基本的な挿話には事欠かない。だがそれらはあたかも大きな枠組みの中に配置された各ピースを集めて完成させるパズルのような趣きの中にある。言わば括弧つきの物語ということである。それはきっと本作が新旧の交代劇、ベテランから新米保安官に授けられる「教育」の物語という構図になっているためであろう。マン自身の言葉によれば、「ごく単純な物語、徒弟見習いの授業」なのである（Missiaen, p.51）。ベイシンガーは「教育的」ということからさらに踏み込んで、この授業は保安官修業の映画であるというだけでなく、観客にとっては、撮影作法の授業でもあるとまで説いている。例えば、「銃を抜く的確な瞬間というのは、編集のレッスン」、「武器を持った相手にどのように、いつ近くかというのは、カメラの動かし方のレッスン」などというわけだ。"shooting" という語が持つ「射撃」と「撮影」という二つの意味に掛けた面白い見方ではある（Basinger, p.112）。

ここでのメインの悪役はネヴィル・ブランド演じるボガダスということになるが、この配役はマン西部劇としては珍しいタイプと言える。つまりハリウッド標準と言いたくなるような実に歴然とした悪役タイプなのだ。他方、現実的に見て本来の悪者であるマガフィー兄弟は、本作中最も人間味のある役であるマコード医師（『遠い国』ではシルクハットのメフィストフェレスのような悪党を演じたジョン・マッキンタイアがここでは町民の尊敬を集める老医師役に転じて、実にいい味を出している）の殺害者であるにも関わらず、どちらかと言えば同情を誘う存在である。したがって、最後は逮捕され、裁判に掛けられることにはなるが、作品中で死ぬことはない。西部劇の定則というものがあるとすれば、これは決してメインの悪役とは言えないだろう。とはいえボガダスにしても、最後の場面で殺されるべき悪者としてはいささか貫禄不足である。彼が少し屈辱を抑えて冷静に振舞えば、大人しく引き下がる勇気を持っていれば、死ぬことはなかつただろう。本作にはこれまでのマン作品に登場したような、ヒーローと精神的に相対し、合わせ鏡のような役割を果たすような悪役はいない。「ヒーローと悪漢の間はリンクしない」（Basinger, p.112）のだ。

本作における興味の中心は、ベテラン保安官から新人保安官への技能の継承の行程である。それはベテラン俳優のフォンダから新人パーキンスへの継承という意味合いも重ねられよう。それは映画撮影そのもののレッスンというベイシングアの説にもつながる。そしてこのレッスンは、一方的なものに終わらない。先輩の元保安官もまた、若い保安官見習いの意気込みに接することにより、言わば初心に帰り、またノナとキップという家族を得て、一旦は見限った社会との和解に至るのだから（Basinger, p.114）。『裸の拍車』で主人公ケンプがレナによって社会との和解に至ったのを思い出させる。この和解は、ベンとミリーの和解にもつながる。保安官として死んだ彼女の父はかつてのモーガンの姿に重なる。しかしモーガンは自己を回復し、ベンに「洗礼」を授けた。彼らの最初の「授業」が河辺で行われたのは意味がある。マンにとって水は、浄化の意味合いをしばしば持っていることは以前にも触れた。

本作は『真昼の決闘』*High Noon*（1952年）との近親性についてしばしば言及される（Basinger, p.111）。確かにモーガンの過去はウィル・ケイン保安官の

置かれた状況を想起させる。またもしモーガンがたまたまこの町にやって来ることがなかったならば、それはベンの置かれた状況でもあっただろう。ハワード・ホークスとジョン・ウェインが同作への反論として『リオ・ブラボー』Rio Bravo (1959年)を撮ったとよく言われる (Hoffmann, p.139)。しかし、実力と義侠心に富んだ友人がたまたまいて、対応を検討するだけの時間的余裕もある程度あったからこそそのチームワークではなかったか。ケインにはその時間がなかったことも大事なところだと思うが。ベンが今後共同体の中で常に支持され、援助されるとは限らない。モーガンの新しい家族はなおさらだ。いばらの道が待っているかもしれない。それでもおのれの使命を自覚し、社会との連帯を信じること、それができるようになったのは、少なくとも味方に付いてくれる誰かがいるのだという確信を持たせたことだ。『真昼の決闘』でも、主人公の妻だけは彼を見捨てなかった。本作には、ヒーローたちのその後が希望をもって暗示されている。『真昼の決闘』への一つの答えとしては、こちらがより大人かもしれない (とはいえ、『リオ・ブラボー』の無類の痛快さを何ら貶めるものではない)。レオーネとの関連では、何より本作の描いた「賞金稼ぎ」としてのヒーロー像が、先の『裸の拍車』以上に、より直接的に『夕陽のガンマン』へとつながっていると思われる点が重要であろう。なお『真昼の決闘』はリー・ヴァン・クリーフの西部劇初出演作でもあった。全くの端役ながら、冒頭に登場してかなりの印象を残していた。ただ本作ではセリフも増え、はるかに西部の男の顔になって来ている。

### 『西部の人』 *Man of the West* (United Artists, 1958)

(ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント TSCP-10242)

製作 :Walter M. Mirisch

原作 :William C. Brown (*The Border Jumpers*) 脚本 :Reginald Rose

撮影 :Ernest Haller 音楽 :Leigh Harline

主な配役 :Gary Cooper (Link Jones), Julie London (Billie Ellis), Lee J. Cobb (Dock Tobin), Arthur O'Connell (Sam Beasley), Jack Lord (Coaley), John Dehner (Claude Tobin), Royal Dano (Trout), Robert Wilke (Ponch)

【梗概】 荒野を渡り、一人の男がクロスカットの町に入る。馬屋に馬を預けたその男はリンク・ジョーンズと名乗り、西へ五日のグッド・ホープから来たと言う。服を着替え、手提げカバンに銃と財布を入れると、男は駅に向かい、フォート・ワース行きの切符を買う。ホームで賭博師風の男に声をかけられる。またその様子を見た保安官から、前に会ったことがないかと尋ねられるが、知らないと答え、ソーミルから来たヘンリー・ライトと名乗る。

汽車に乗り込むと、サム・ビーズリーと名乗って、先の賭博師風の男が隣に座る。冗舌なサムの誘導に乗って、学校を作るため教師を雇いに行くという旅の目的や前払いのための相当な金額を所持していることを話してしまう。それを素知らぬ顔で聞いている男がいた。サムは別の席の女性客の隣に移る。クロスカットの酒場から出てきたのをリンクも見かけた歌手、ビリー・エリスだった。親しげに話しかけるサムだが、彼女の応答はしごく冷淡だ。

夜が明け、汽車は給水と燃料の薪の補給のため一時停車をする。汽車の到着前から、近くの崖下には三人の騎乗の男たちが身を潜めていた。車掌が薪積みの協力を男の客たちに求める。立ち上がったリンクにサムが声をかけ、教師の資格もあるとビリーを紹介する。銃を持った護衛役の男が来て、リンクたちにも協力を求める。リンクは護衛に手提げカバンの見張りを頼むと、二人と共に車外に出る。だが最前の男は眠っている様子で動かないでいるが、崖下の三人組が寄って来ると何か合図を送る。待っていたように三人は銃を撃ち放しながら、襲撃を開始する。薪の積み込みを手伝っていたリンクは、走り回る馬を避けようとして崖下に転がり落ちる。賊は金塊を積んだ車両への侵入を試みるが、護衛の冷静な応戦に手をこまねいている内に、汽車が発進する。車内にいた先の男はリンクの手提げカバンを奪うと仲間の馬の背に飛び乗る。その男の背中を護衛の銃弾が捕える。次第に遠ざかる汽車。襲撃は失敗した。後には崖下に落ちたリンクとサム、それにビリーの三人だけが残される。

歩き出した三人は荒れ果てた農家に辿り着く。リンクはそれがまだあったことに驚き、かつてそこに住んでいたと漏らす。二人を納屋に留まらせ、リンクは母屋を見に行く。中には先の三人の襲撃犯がいた。熱くなりやすいコーリー、唾者のトラウト、少し臆病なポンチの三人だ。リンクは銃を突きつけられ



る。だが奥から老人が出てきて、リンクを見ると懐かし気にその名を呼ぶ。老人はリンクの叔父で強盗団の首領、ドック・トービン、コーリーをいとこだと紹介する。奥で男のうめき声がある。護衛に撃たれた男だ。ドックは楽にさせるよう命じる。ひるむポンチやトラウトを尻目に、コーリーが男を撃つ。リンクはドックに帰ってきたと思わせる芝居に出る。サムとビリーを呼び、ビリーは自分の情婦だと紹介する。サムとリンクが死体を埋めている間、コーリーたちはビリーにストリップをさせていた。止めようとするリンクにコーリーがナイフを突きつける。だがドックが止めるように命じる。

納屋でリンクはビリーと一緒に毛布にくるまり、様子を窺いに来たドックに疑いを抱かせないように振舞う。ビリーに聞かれるままに、リンクは身の上を語る。両親は無く、叔父の下で育ったが、教わったのは強盗と殺人だけだ。世の中には別の人生があると知って逃げ出した。彼を受け入れてくれた人々のおかげで、今は妻と二人の子供と暮らしていると。

翌朝、もう一人のいとこのクロードがやって来て、例の保安官がリンクの顔を思い出し、方々に手配を回したと教える。列車強盗の失敗もそのためだと憤る。ドックはリンクに仲間に戻るしかないなど笑う。クロードとコーリーはリンクたちを殺すよう言うが、ドックは許さない。リンクらを連れて、一行はドックの長年の夢である鉱山町ラッサーの銀行襲撃に向けて出発する。

馬車でクロードの隣に座ったリンクは、ドックと手を切るよう説得を試みるが、かえってクロードの反発を招く。休憩の合間、ポンチを相手に力比べをするドックは衰え知らずであることを誇示する。水を向けられたリンクはコーリーを煽り、二人の格闘が始まる。一進一退の激闘が続くが、ついにリンクが圧倒すると、コーリーの服を引き剥がす。ビリーへの仕打ちの仕返しだ。屈辱と怒りに震え、コーリーが銃を取る。だがサムが間に入り、彼が撃たれる。リンクが殺されたら皆助からないと、とっさに取った行動だった。なお銃を捨てないのを見てドックはやむなくコーリーを撃つ。夜、ドックは翌日の襲撃計画を話す。先発する斥候の役をリンクが買って出る。一人で行くというリンクに、ドックはトラウトを連れて行くよう命じる。クロードは密かにトラウトにリンクの殺害を命じる。

翌日、リンクとトラウトはラッサーに向けて先発する。だがラッサーはすでにゴースタウンとなっていた。元の銀行に入ると、震える手に銃を持ったメキシコ人の女が出てきて、夫と二人だけしか町にはいない、出て行ってくれと頼む。リンクの制止も聞かずにトラウトは彼女を撃つ。リンクは素早く彼女の銃を取ってトラウトを撃つ。外へと逃れるトラウトだが、やがて路上に倒れ、息絶える。数時間がたち、クロードとポンチの二人がやって来る。トラウトの死体を見て、クロードはリンクに向かって対決を叫ぶ。二人は二手に分かれ、身を隠して進む。クロードは正面から接近し、ポンチを銀行の背後に回って屋根から狙う。それに気づいたリンクがまずポンチを倒す。クロードとリンクは激しい銃撃を続け、共に相手の銃弾を受けて傷つく。リンクは銀行のポーチの上で、クロードはポーチの下に入り、共に横になった状態で互いに相手の位置を窺う。リンクはおとりの銃を投げてクロードの銃撃を誘い、彼の位置を確認するや、ポーチの下に降り、的確にクロードを撃つ。

リンクが宿営地の馬車まで戻るがドックはおらず、傷つき、泣きぬれるビリーの姿だけがあった。怒りに震え、リンクはドックの名を叫ぶ。近くにそびえる岩山の上からドックが返す。保安官に引き渡すというリンクの言葉をあざ笑い、ドックは銃を撃ち放す。だが最後はリンクの銃弾を受け、岩上から転げ落ちる。馬車を駆るリンクが、これからどうするのかと隣のビリーに問う。ビリーは今まで通り「歌う」と答えて、初めて好きになった人のことは忘れられないだろうと告げる。

．．．

マン西部劇の十作目である。これまで半分の五作品で主役を務めたジェームズ・スチュワートの他は、作品ごと主演俳優は異なっていた。前作でヘンリー・フォンダが、本作ではいよいよゲーリー・クーパーの登場である。

冒頭の場面、荒野を渡る馬上のクーパーの姿が写し出される。背景と共に、ウエスタン音楽、それも何となく陽気な音楽が聞こえてくる。クーパーを迎えて、まっとうな「西部劇」を作ろうとでもいうのか。いや、まさか。やがて西部の町へと静かに入る。酒場の前で馬を留めると、ちょうど男が出て来て、看板の掛け替えを始める。手伝おうと、クーパーが寄る。酒場から今度は女が出

て来て、店の男と話し始める。男が呼んだその名が降ろされた古い看板に書かれた歌手の名だと分かる。彼女はその店を辞めて、どこか別の町へ旅立つのだろう。実にオーソドックスな西部劇の始まりである。「寅さん」シリーズの一場面を思い起こさせるとさえ言いたくなる。前作の冒頭も実はこれとよく似ていた。荒野を渡るフォンダが、やがて静かに町に入るところから始まった。ただし死体と一緒にだ。マンがオーソドックスな物語で満足するはずはない。前作にしる、本作にしる、マンがこの二人の名優の一般的なイメージを逆手に取って物語を構成しようと企んだのは間違いない。

クーパー演じるリンク・ジョーンズが馬屋に向かい、西部男の服をジャケットに着替え、所持金や銃をカバンにそっとしまうあたりから、これはちょっと違う、という雰囲気になる。駅では初めて汽車に乗るお上りさんの風を丸出しにする。怪訝そうな保安官の前で、ことさら武骨な田舎者のように振舞うが、偽名を使ったのはやはりおかしい、何かある。この汽車の旅は始まりだった。男が長い間近付くことを避けて続けた過去の世界へと否応なく引き戻される旅の始まりだった。もはや避けて通れない「冒険」の始まり。SFやオカルト映画の世界のように、我々は主人公たちが悪夢の世界にさ迷いこむの見ることになる。「これは全くのお化け話 (spook story)」なのだ (Basinger, p.129)。

かつてならず者だった男は仲間を捨てて、まっとうな人生を送ってきた。だが過去の亡霊は彼をほうっておかなかった。本作は過去を清算するための闘いの物語だ。そして闘いが終わり、亡霊を追い払った後は元の通常の世界に戻る。ただそれだけだ。これまでのマン西部劇の物語と決定的に異なる点はそこだ。これまでの作品の主人公や主要な登場人物たちは「事件」を経験することで、一種の浄化作用のようなものを受ける。復讐心、様々な葛藤やわだかまりは消え失せ、新しい生が未来に輝く。闘いの果てに死んでしまう『流血の谷』のランスを除けば、憑き物が落ちたかのようにヒーローたちはすがすがしい顔でラストシーンを迎える。そのランスにしても覚悟した死を迎える者の高貴さが閃いていた。だがここでのリンクの顔はそれらとは異なる。亡霊は確かに祓われた。過去を消し、平穏なまともな人生を取り戻すため、彼は何をしたのか。それは彼があればほど憎んだはずの殺人だった。勝者の歓喜などない。そこ

にあるのは疲労感、そしておそらく虚無感だ。これから何かが変わるだろうか。ヒーローもヒロインも、悪夢の間中断されていた元の世界の生活に戻る。それだけだ。およそこのような苦い幕切れの西部劇があっただろうか。ただこれで「終わった」という感覚が強く残るばかりだ。ベイシンガーは本作をもってマンの西部劇の「頂点」だと要約する。この上は「またもう一つ別の西部劇を撮ることなどは無駄なことなのだ」と (Basinger, p.129)。

『西部の人』、原題 "*Man of the West*" というタイトルは暗示的である。主人公を指しているとするのが普通だろうが、どういう意味でリンクは西部の人(男)なのだろうか。この "*Man*" には冠詞が付けられていない。タイトルだからというだけかもしれないが、特定の人物を指示するのを避ける意図、普遍化の意図なども考えられよう。ベイシンガーがその著作の章題で施したように、このタイトルはマン自身の名と掛け言葉にできる ("*Mann of the West*"). 当人に全く自覚がなかったとも思えない。彼自身の過去についても以前触れたが、消し去りたい過去とは、マン自身の葛藤の表れでもあるのではないか。なお邦題が「男」ではなく「人」となったのは、同じゲーリー・クーパー主演の以前の作に『西部の男』*The Westerner* (1940年) という名作があったためであろう。

ベイシンガーは本作の「落ち着いたペース (deliberate pace)」に着目している (Basinger, p.128)。それがよく分かるのは、そしてそれがいかに効果的であるかが分かる一例が、終幕のゴーストタウン到着の場面。トラウト(「サケ、マス」類を指す語だが、用心深さを含意するという。この仇名は、用心深いその性質からか)と共にリンクがラッサーに着き、ゆっくりと町の様子を見わたす場面だ。町の入り口近くに着いた二人は、画面奥の町の入り口を眺める。二人の背の間を中心にして、カメラは町の方を映している。やがて二人は町の方へ進み始める。それからカメラはやや左、リンクの側へとやや位置をずらしながら入り口近くに達するまでリンクの姿を中心に据えて移動の様を映す。その後二度ほど画面が切り替わり、二人が銀行の前に到着するまで約一分。我々に高まる期待はどれほどのものになるだろうか。トラウトを倒した後、物語の上では他の者の到着まで数時間を待たなければならない。もちろんその時間は省

略されるわけだが、銀行のポーチでゆったりとタバコをふかすリンクの姿が映し出されると、画面上の実時間はわずかなのに、そこにゆっくりした時間の流れが、相当の時間が経過した気分が感じられるのだ。

本作にジャン・リュック・ゴダールが特別の称賛を送ったことはよく知られている (*Cahiers du Cinéma*, no.92, 1959)。ただその独特の言語表現を明確に理解するのは私には難しい。いずれまた扱う機会もあろうが、一言だけ引いておこう。『ララミーから来た男』と『胸に輝く星』と『西部の人』の三本をつくられた順に見直してみれば、映画作家の中で最もウェルギリウスのな映画作家におけるこの疑いようなない貧困化、この明白なそっけなき、この極端な単純化はひとつの模索であり、次第に体系的に直線的なものになってゆくドラマのこの構成はひとつの探求でありうるということ、今日になってやっと『西部の人』が明らかにしているように、それ自身が前進の歩みであるような模索と探求でありうるということがわかるのである (p.356)。

### 『シマロン』 *Cimarron*, MGM, 1960

製作 :Edward Grainger

原作 :Edna Ferber 脚本 :Arnold Schulman,(Halstead Welles)

撮影 :Robert Surtees 音楽 :Franz Waxman, Paul Francis Webster

補助監督 :Ridgeway Callow

主な配役 :Glenn Ford (Yancy Cravat), Maria Schell (Sabra Cravat), Anne Baxter (Dixie Lee), Arthur O'Connell (Tom Wyatt), Russ Tamblyn (the Cherokee Kid), Mercedes McCambridge (Sarah Wyatt), Vic Morrow (Wes), Robert Keith (Sam Pegler), Aline MacMahon (Mrs. Pegler), Charles McGraw (Bob Yountis), Henry Morgan (Jesse Rickey), David Opatoshu (Sol Levy)

【梗概】 ヤンシー・クラヴァットは新妻のセーブラと共に彼女の実家を出て、ランド・ラッシュに参加すべくオクラハマに向け出発する。途中、水浴中のセーブラをからかう若者三人組と争いになるが、古い友人の息子キッドたちだと分かり、再会を喜び合う。また歩いて同地を目指すワイアット夫妻とも知

り合い、馬車に同乗させる。ワイアット夫妻には大勢の子供たちもいたのだが。大勢が集まってランド・ラッシュの開始を待つ宿営地では、ならず者ヨーンティスらがチェロキー族の夫婦を追い出そうと妨害を始める。ヤンシーが止めに入り、騎兵隊員も駆けつけ、夫婦の参加資格を確認して収める。ヨーンティスは脅し文句を残して去る。またヤンシーはオセージの町で新聞紙「オクラハマ・ウィグワム」を発行するサム・ペグラー夫妻や植字工のジェシーとも再会する。

1889年4月22日、ランド・ラッシュの幕が切って落とされる。競争相手の中には、ヤンシーとも旧知のディキシーと呼ばれる女性がいた。二人は同じ土地を狙い、互いに馬を飛ばす。ヤンシーが一步先んじたかに思われた時、どこからか助けを求める女の叫び声が聞こえ、ヤンシーは馬を止める。再び駆けだした時はすでに遅く、目指す場所には一足先に着いたディキシーがいた。彼女の策略にはまったのだ。ヤンシーはセーブラの元に戻り、土地は諦めたと伝える。一方サム・ペグラーは、馬車から落ち、他の馬車に轢かれて命を落としていた。ヤンシーはペグラー夫人に新聞社を引き継ぐ決意を伝え、ジェシーに協力を頼む。

ヤンシーとセーブラ、ジェシーの三人はオセージで新聞事業に着手する。ヨーンティスがユダヤ人の行商人ソル・レヴィをいたぶっていたのをヤンシーが止めに入る。一緒になってふざけていた中にキッドたちがいたのを、きつくとしなめるヤンシー。やがてセーブラが懐妊し、出産が迫る。そんな折、ヨーンティスらが例のチェロキー族の夫婦を襲撃する。ヤンシーが駆けつけた時にはすでに夫はリンチの犠牲になっていた。ヤンシーの怒りの銃弾がヨーンティスを倒す。セーブラはベテランのワイアット夫人に見守られ、無事男の子を出産する。帰って来たヤンシーは妻を抱きしめる。男の子は、ヤンシーの仇名で、中南米スペイン語で「野生の」を意味するシマロンと名付けられる。

残されたチェロキーの寡婦とその娘ルビーの庇護者となったヤンシーは、成長したルビーを町の学校に通わせようとするが拒絶される。ヤンシーの激しい抗議も受け入れられない。ある日ディキシーがヤンシーの元を訪れ、農地を売るための書類の作成を依頼する。セーブラが二人の関係を問うが、ヤンシーは

曖昧にごまかす。ディキシーはかつて恋人であったが、ヤンシーの方から離れたのだった。復縁を迫るディキシーに、二つの帽子は被れないとヤンシーはことわる。

キッドはどうとう「チェロキー・キッド」の名で知られるお尋ね者となる。不幸な彼の境涯を知るヤンシーは他の新聞がただの悪党扱いをすることに我慢ができない。そんな折、オセージの銀行をチェロキー・キッドと仲間二人が襲うが失敗、一人が倒され、キッドとウェスの二人は学校に逃げ込む。誰も手を出せないでいる中、キッドと親しいヤンシーが説得のため単身乗り込む。ウェスが子供を盾に脱出を図ろうとするのを止めようとしたキッドがウェスに撃たれる。キッドの銃を取り、ヤンシーがウェスを倒す。町の英雄となったヤンシーだが、彼の心は暗い。人を殺して報酬は受け取れないとヤンシーは賞金の小切手を破り捨てる。セーブラは、なぜ子供や家族のためと思って受け取れないのかと憤る。

オクラホマに二度目のランド・ラッシュ開催の報が届く。再び参加しようと言うヤンシーに、新聞事業に専念するようセーブラは説く。だが憑かれたように飛び出してゆく。その後音沙汰なく年が過ぎ、アラスカから白熊の毛皮が届いただけだ。意を決してセーブラは、今や町で「クラブ」を経営するディキシーの元を訪れ、夫の消息を尋ねる。夫との関係を疑うセーブラに、ディキシーは彼が愛しているのは彼女だけだと言う。

オセージの町は米西戦争の英雄となったヤンシーを迎えようとお祭り騒ぎになっている。だが帰還予定の汽車に彼の姿はなかった。落胆して自宅に戻ったセーブラ、そこにヤンシーの姿があった。

友人ワイアットがついに石油の鉱脈を掘り当て、長年の貧乏暮らしから一挙に大富豪になる。ヤンシーも採掘を試みるが出たのは水だけだった。インディアン居留地からも石油が出たとの報を得て、我がことのように喜ぶヤンシーだったが、ワイアットからすでに権利を買い取ったと聞かされ、激怒する。証拠がないと言うセーブラの忠告に耳も貸さず、友人の不正を書き立てるヤンシー。その頃、オクラホマは州昇格に向けて知事候補の名が取りざたされるようになっていた。ついにワシントンからヤンシーの元に州知事就任への打診が届

く。セーブラと共にワシントンに向かったヤンシーを待っていたのはワイアットだった。知事就任は彼に味方することが条件だった。ヤンシーが知事にはなれないと告げると、ついにセーブラはこれまでのうっ積を爆発させる。

ヤンシーが出て行った後、古くからの友人ソル・レヴィにも助けられ、セーブラはジェシーと共に新聞社を切り盛りする。だが息子シマロンは、ルビーとの仲をセーブラにとがめられ、ルビーと共に家を出る。歳月は流れ、「オクラホマ・ウィグワム」は大新聞に成長し、彼女は下院議員に選出される。祝賀パーティには、二人の孫と今は夫人となったルビーを伴って息子が駆けつけていた。和解の抱擁を息子夫婦と交わすセーブラ。ワイアット夫妻、レヴィ、それにペグラー夫人も駆けつけた。セーブラは夫ヤンシーこそこの場にふさわしいと謝辞を締めくくる。

やがてセーブラの元に、イギリス国王名で知らせが届く。夫ヤンシーは西部戦線で名誉の戦死を遂げていた。

．．．

前作を、これ以上西部劇は作れないところまで行った「頂点」と評したベインシンガーは、本作を「叙事映画 (epic film)」製作時代の始まりと見る。当時このジャンルはブームを迎えており、「大監督」としてマンは『エル・シド』*El Cid* (1961年)、『ローマ帝国の滅亡』*The Fall of the Roman Empire* (1964年)を撮ることになる。他にもスタンリー・キューブリック監督で知られる『スパルタカス』*Spartacus* (1960年)も、当初はマンが監督を務めたものが交代になった作品だが、主演のマーク・ダグラスと意見が合わなかったためと言われる (Basinger, p.12-13)。

実はこの『シマロン』にも問題があり、製作者側とマンの間には考えの食い違いがあったようだ。原作はエドナ・ファーバーの1929年の小説で、1931年に早くも最初の映画化がなされ、アカデミー作品賞に輝いている。なお彼女はジェームズ・ディーンで知られる『ジャイアンツ』*Giant* (1956年)の原作者でもある (Hoffmann, p.23)。マンが描きたかったのは、「19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカを形成した社会運動のパノラマ」だったが、製作側が望んだのは「西部を舞台にした壮大な恋愛物語」だった。また野外撮影を元々重



視してきたマンに対し、製作側はスタジオでのセット撮影を望んだ。結局現場を去ったマンの代わりに、補助監督が主人公カップルの愛情を描く場面などを追加撮影したという (Darby, p.20)。本作のどうも中途半端な出来具合もこれで頷ける。本作を西部劇として分類するのも躊躇させられる。そう呼べるのは前半部、チェロキー・キッドの最後の挿話くらいまでで、その後は時代も風俗も近代化した後の話になる。ただその西部劇の部分には最良のマン作品のエッセンスを見ることができるといえる。今挙げたキッドの最後の場面の他にも、冒頭のランド・ラッシュの場面、悪漢ヨーンティスとの対決場面などは見所である。またアン・バクスター演じるかつての恋人ディキシ (単騎ランド・ラッシュに挑む女傑だ) とグレン・フォード演じる主人公ヤンシーとが絡む場面も西部劇らしい雰囲気や情を湛えている。役の性格に難がある割に、さすがにグレン・フォードはうまくこなしている。総じて彼の活躍場面には活気がある。比べると気の毒だが、本来のヒロイン、マリア・シェル演じるセーブラが絡む場面はあまり味気ないようだ。原作の主眼は実はこの女性の人間的、社会的成長にオクラハマ州の形成と発展を重ね合わせたところにあるはずだが。夫が行方知らずになって後、古い友人たちの支援を受けつつも、新聞社を大会社にまで育て上げ、また州選出の下院議員となるまでのこれは女の半生記、それが本作の本来の姿であろう。だがマリア・シェルはグレン・フォードに振り回されるばかりで影が薄い。夫の失踪後に急に主役扱いになるが、そのことを観客が理解できたかどうかの内に、つまりヤンシーはまた帰って来るのだろうという観客の気持ちや曖昧なままに残されている内に、物語上の時間はいつまでも進められて結末に至る。最後に彼女が行く不在の夫についてのスピーチもしたがあまり冴えない。1931年版を知る人は、死にゆく夫との再会の場面が最後に用意されていると考えたかもしれないが、本作にはそれもなく、ただ最後に回想シーンとして彼の姿が映し出されて終わる。現在、日本版のDVD等は出ていないようだが (1931年版はある)、今後はどうだろうか。ただ原作者はどちらかと言えば本作の方が良いと思っていたという (Darby, p.21)。

## 終わりに

これまでアンソニー・マンの西部劇作品全十一作について、参考資料等を頼りにその製作の経緯等を探り、内容等について簡単に吟味・考察をまとめてきた。セルジオ・レオーネ作品との接点を探ることが眼目ではあったが、マン作品そのものとの出会いがあまりに強烈であって、本来の道のりを失いそうになることしきりではある。今後これらを活かして、更なる論考が進められればと考えているが、最後にもう一つ別の作品について触れて終わりとしたい。マンの作品について調べていると、上でも触れたが、しばしば彼が撮るはずだった作品、撮りかけたが止めた作品というのに出会う。ハリウッドでは珍しくもないことではあるし、すべてに着目することはできないが、一つだけ名前を挙げておく。ジェームズ・スチュワート主演の『夜の道』Night Passage (1957年)は、脚本が『ウィンチェスター銃' 73』など三本のマン西部劇を手掛けたボーデン・チェイスであり、あらすじだけ読むならば、いかにもマン＝スチュワート西部劇にふさわしそうな作品である。しかも相手役には、西部劇スター、オーディ・マーフィーがスチュワートの「悪い」弟役、他にも『ウィンチェスター銃' 73』の悪役ダン・デュリエに、『シェーン』の名子役ブランドン・デ・ワイルドなど、クレジットを眺めて食指を動かされない方がおかしいほどだ。ただ監督マンではないという一点のみが残念なところだ。脚本の「ソフトさ」に不満を持ったマンとあくまでそれを支持したスチュワートとの間で意見が合わず、結局監督が代わることになったためだという。そしてこれがこの不滅のコンビの最終的破局でもあった (Eliot, p.303)。ここで内容等の詳細に触れる余裕はないが、同作を見て実感するのは、多くの人が言うことだが、マンがいかに優れた(西部劇の)監督だったかということである。逆説的だが、それを実感するためだけにでも見る価値のある作品だ。

## 参考文献

Jeanine Basinger, *Anthony Mann*, new edition, Middletown, Wesleyan University Press, 2007.

Charles Bitsch et Claude Chabrol, «Entretien avec Anthony Mann», *Cahiers du Cinéma*,

no.69, 1957, pp.2-19.

William Darby, *Anthony Mann. The Film Career*, Jefferson, McFarland, 2009.

Marc Eliot, *James Stewart. A Biography*, London, Aurum Press, 2006.

Henryk Hoffmann, "*A*" *Western Filmmakers: A Biographical Dictionary of Writers, Directors, Cinematographers, Composers, Actors and Actresses*, Jefferson, McFarland, 2000.

Jean-Claude Missiaen, «Entretien avec Anthony Mann», *Cahiers du Cinéma*, no.190, 1967, pp.46-53.

ジャン＝リュック・ゴダール、『ゴダール全評論・全発言Ⅰ』、奥村昭夫訳、筑摩書房、1998年（Jean-Luc Godard, *Jean-Luc Godard par Jean-Luc Godard*, Paris, Editions de l'Etoile-Cahiers du Cinéma, 1985）